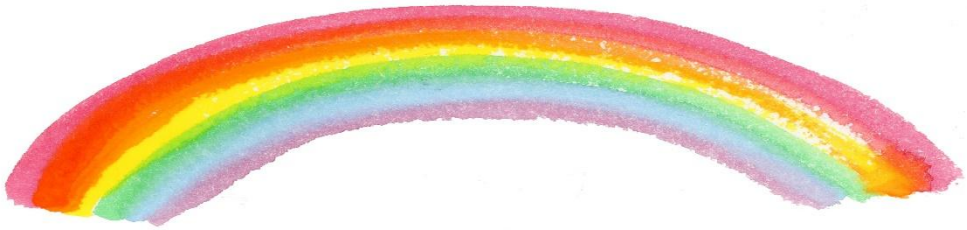


一般社団法人東京都医療ソーシャルワーカー協会　　No.63　2026.5

つ　た　え　る

TSUTAERU

心をつたえる…様子をつたえる…事実をつたえる…

手立てをつたえる…気持ちを伝える

【１】2025 年度災害支援対策委員会
【２】災害支援研修に参加して
【３】2026.3. 4 災害支援研修「自分に、何が出来るだろう !?」 との問いに答えて
【４】安否確認訓練　～協会として会員の被災状況を確認し、支援ニーズを把握していく～
【５】道～東京 DWAT 八丈島災害支援活動を通して～
【６】編集後記
【７】災害支援対策委員名簿
【８】災害支援対策委員会募集案内

【１】2025 年度災害支援対策委員会

康明会病院　冨士川泰裕

　みなさん、昨年度はどのような一年だったでしょうか。
今年度災害支援についてご報告いたします。日本医療ソーシャルワーカー協会が石川県珠洲市で継続してきた支援活動は、2026 年 3 月 31 日をもって一区切りを迎えることとなりました。現地責任者の福井康江氏が珠洲市に在住し活動を牽引し、全国から 194 名、延べ 453 名のソーシャルワーカーが参加しました。都協会としても、多くの会員が支援に携わりました。
　この節目にあたり、私たちの支援が、被災された方々の「日常を取り戻す」一助となれたのか、改めて問い直す機会でもあります。
　都協会として石川県協会と共催で災害研修を実施しました。 1.5 次避難所や珠洲市支援で出会った仲間と再会でき、とても良い機会となりました。 これまで被災地との交流を大切にしてきたこともあり、今回のような研修の機会を今後も継続していきたいと感じました。
委員から一年間の取り組みについての報告がありますので、ぜひご覧ください。

【２】災害支援研修に参加して

東京医科大学八王子医療センター 金山 真子

このたび、2026 年 3 月 4 日、石川県 MSW 協会および災害対策委員会共催による災害支援研修に参加しました。本研修のテーマは、「災害ソーシャルワークは日々の業務にある！？～それぞれの葛藤は支援のはじまり～」でした。災害は決して特別な出来事ではなく、常にどこかで起こり得るものであり、「他人事」ではなく「我が事」として捉えること、また支援者同士がつながり、互いに助け合える関係性を築くことを目的として開催された研修です。日頃の業務を振り返り、災害支援と通ずる点や、実際に被災地ではどのような支援が求められるのかを考える良い機会になると感じ、参加しました。
研修内容は、①東京都協会から災害対策委員会の歩み、東京 DWAT の活動、日本協会による被災地派遣について、②石川県協会から能登地震発生時の現地の様子や、ソーシャルワーカーが直面した支援の実際、苦悩や葛藤について、③グループディスカッション、の三部構成でした。
なかでも、石川県協会からのお話は非常に貴重な学びとなりました。発災後、通常業務を抱えながら避難者支援にも対応する必要があり、さらにライフラインの停止により、必要な医療を十分に提供できない状況があったとのことです。被災者の思いに寄り添いながらも、退

院し生活へ戻っていく必要がある。患者さんの気持ちと、組織で働く一員としての役割との間で、ソーシャルワーカー自身も多くの葛藤を抱えながら調整を行っていたと伺いました。その葛藤は、私たちが日常業務の中で経験する迷いや悩みと共通するものがあると感じました。

私はソーシャルワーカーとしての経験はまだ浅いですが、「この支援で本当に良かったのだろうか」と悩み続ける仕事であると日々実感しています。そのような悩みや葛藤に向き合い、日常業務を通して自分自身を磨き続けることが、結果として災害時の支援にもつながっていくのではないかと感じました。

また、災害支援への派遣を考える際、職場の理解をどのように得るか不安に感じている方も少なくないと思います。私が参加したグループディスカッションでは、災害支援に対して各職場がどのような体制を取っているかについて意見交換を行いました。有給休暇を利用して派遣される職場や、業務として派遣される職場など、対応はさまざまでした。その中で特に印象に残ったのは、「以前は有給を利用しての派遣であったが、PTSD を発症する職員もいたことから、支援者のメンタルヘルスを含めた健康を守る責任があるとの判断で、業務として派遣する体制に切り替えた」というお話です。

「良い支援を行うためには、支援者自身が健康であることが重要である」ともいわれます。今後も、災害対策委員会や東京 DWAT の活動を通して、医療機関や社会全体に対し、被災地における医療ソーシャルワーカーの役割や支援の重要性について理解を深めていただけるよう、微力ながら貢献していきたいと思います。

研修後の記念写真

【３】2026.3. 4 災害支援研修

「自分に、何が出来るだろう !?」 との問いに答えて

新宿区男女共同参画推進センター　武山ゆかり

テレビでは、東日本大震災の津波や気仙沼の火災、直後に歩いた瓦礫の街の映像が増えていき、今も見つからぬ家族への思いが流れ・・・ 3 月 10 日は東京大空襲。1 月の 7 ブロックと教育部の共同研修で、講師 加藤彰彦氏（ペンネーム野本三吉さん）からは、その日、焼夷弾の降る中を逃げまどい、妹さんを亡くした話しを、胸の塞がる思いでお聞きし、特集報道も連日。今年の 3 月 11 日の前後数日は、何故か私も涙を流してばかりいた。15 年間、被災地支援中でも、こんなに、涙が込みあげて、嗚咽が抑えきれない、などということは、無かったのに、テレビの報道にも、新聞にも、泣いてばかりいた。そういえば 1 月の阪神淡路大震災の特集報道の時も、やたら思い出されて・・・もしかして、フラッシュバック !?! 年取って涙もろくなっただけでしょ、と家人には言われたが・・・。
2024 年、能登半島地震の支援に、日本協会から珠洲市に入って欲しいと要請され、1.5 次避難所で半月ほどの滞在を 2 回、石川県協会の方々のお世話になった。懐かしい方々のお顔を見たいと、研修会に参加したら、いくつかに分けたグループディスカッションのファシリテータを割り振られて、久しぶりに緊張した時間を過ごした。お蔭で、ベソベソ泣いてもいられなくなり、災害支援や減災に力を尽くさなければと、思いを新たにする機会となった。
研修会冒頭の当協会の支援経過や、石川県での発災後の協会内の協議や方針検討、その間の各機関の苦悩や行政支援、全国からの協力経過など報告があり、次いで、都協会員ＤＷＡＴの、能登地震、八丈島災害支援の報告があり、「ＳＷは、災害と対策そのものである」といった研究者の分析などが紹介され、災害支援の意義を共有、15 年の間に感情から科学へとの発展を感じた。
グループディスカッションは、下記の中から話しやすいテーマを自由に発言していただいた。

１．本日の講演を聞いての気づきや感想
２．災害支援において、今から自分にできると思ったこと
３．災害支援と普段のソーシャルワークの共通点

時間が僅かなため、グループ参加者の発言は、一巡するだけになったが、その後の全体討論での質問に答え、石川県協会の話も聞くことが出来、今回の研修の大きな成果を感じることが出来た。石川県協会は、東日本大震災への支援の後も、長期に被災地支援を続け、会員の中で、経験を共有し、継承してきたことが、能登地震の際も、会員が助け合い、全国からの支援を組織として受け止め、困難な時期を乗り越えることが出来る「受援力」の向上となっ

た、と結ばれた。
都協会の研修参加者の多くが、被災地に立ったことは無く、支援の経験もまだ無いという方もあったが、災害時に動けるようになりたい、普段から備えておけることは何かを知りたい、と参加されていた。こうした声に、研修時間内では伝えきれなかった部分を、お伝えしたい。
最近頻発する豪雨災害や台風の大型化、そして周期的に予想される地下の大きな動き、火山活動の勃発など等、「何が有ってもおかしくない、想定外の被害」への備えは、人の命に関わる私たちＭＳＷの仕事には欠くことは出来ない。その視点から、開催者の提起した 3 番目のテーマは大変重要と言える。グループディスカッションでも少し触れたが、多くの方にも知って欲しいと思い、委員会の勧めもあり、皆さんにお伝えできる災害対策委員会の通信『つたえる』に掲載することとした。

3.災害支援と普段のソーシャルワークの共通点
医療福祉情報の提供は普段からやっていますか？ かつて勤めていた病院でも『医療相談室だより』をつくり、掲示板に貼ったり、関係機関に送付したりしていました。「MSW って、こんな仕事をしているんですね」と、知ってもらうことが出来ました。
阪神淡路訪問の後、院内や地域、都協会へも、倒壊家屋の写真や支援活動の様子、被災者のニーズなど、当時は模造紙に写真を貼付け、説明を書きこみ展示、募金や小さなバザーを病院や公民館の片隅を借り開催しました。退院支援などで関係機関訪問時には、支援報告書を持参すると、喜んで受け取ってもらえました。
災害支援の活動を、機会あるごとに報告すると、MSW の活動の広報にもなりました。まだ DMAT も組織されておらず、心を痛めていたお金持ちの医師たちも、看護師長もそれぞれの支援金や白衣や白いストッキング、予防衣、薬局の強壮ドリンクなど、たくさん託してくれました。春休みは看護学生や医学系大学生を、区役所発行の通行証やヘルメットと一緒に車に乗せて、医師のカンパでガソリンを満タンにして往復しました。コツコツ院内外に行っていた「広報」が、災害時の支援に繋がったのです。2003 年の中越地震の時は、発災 2 日目に福島県経由でバスで新潟に行き、長岡社協の炊き出しや物資配布の様子を伝えました。山間地から福祉施設の転用避難所に避難した高齢者のケアニーズをほりおこし、日赤の看護師や保健師が入るまでの繋ぎをし、医療サイドの SW らしい活動も出来た支援になりました。組織的支援活動が始まるまでの、命に関わる時期の支援も、ボランティアに集まった方の中で呼びかけたり、MSW の組織への報告もできました。
都リハビリテーション病院での支援の試み （ほぼ全員が、障害や体の不自由を抱え退院する病院）

- 「退院時シート」に、災害時への備えの欄を新設（自宅内の安全・避難時の支援・方法、避難所での配慮など）→地域での各種集会での紹介。地域の関係機関（CM・包括・役所）での活用、留意を依頼（障害特性・詳細の照会はＭＳＷ）。
- 病院の災害訓練時の MSW の役割の積極的主張・申し出。トリアージ訓練時 興奮状

態の対応、見落としの発見（体調悪化、我慢してしまう人）、避難者一覧表への追加情報記入（留意点を被災者から聞いて書くなど）、患者家族対応（本人以外からの情報、霊安室担当となったMSWの経験継承）、近隣情報の収集、交通状況、医療機関情報などの収集（普段からのネットワーク→伝達訓練）。

- 『HUGゲーム』訓練の開催、指導（避難所運営ゲーム）。患者・家族への配慮の視点。
- 「お薬手帳バッグ」の作成・普及。カルテの無い患者の医療情報把握のために。避難の時は自身で、首から下げ、胸に抱えて逃げる。薬剤師会と協働普及活動。
- 心のケア。「(被災地に)ご親戚とか、親しい方とか、おいでじゃなかったですか？」「避難でいらしてる方はお困りではないですか？」→ケースヒストリー聴取。
- 発災後、協会に理事が集まり、1 枚ずつパウチし作成した「被災地から避難していらした方へ―MSWにご相談ください」を全会員に郵送し、『院内掲示広報』を（広報の日常化）。

小さな 1 歩 1 歩が、それまで医療と福祉の視点に無かった「減災のための活動」へと発展し、東日本の現地責任者や災害の委員会発足、能登支援への私へのお声掛けに繋がったのだと思います。

胸をはって災害支援に行ける、などという時代でなかった当時から、支援ボランティア派遣時の、交通費や宿泊費の支援、業務扱いの実現、帰県後、報告会の開催など、素晴らしく発展しました。被災地に常勤のMSWが常駐し、支援ボラを受け入れるなども、東日本大震災から、行政との交渉で可能になりました。

今回の石川県協会の様に、交代で県の避難所に人を出す、若い人が全国のベテランと協働して学ぶ、という素晴らしい活動へと、大きく発展することが出来たのは、どのような日常業務に活かした積み重ねがあったからなのか？知りたいと思い、たくさん語っていただきました。石川県協会として、東日本大震災後に、長く支援を続けたことがその基礎にありました。

都協会では、たくさんの活動に発展したのは、支援報告集『つたえる』の発行（思いを集める組織の力）、支援活動の広報、他団体への働きかけ、協会支援のMSW派遣（都・日本協会）、福島県協会との交流フィールドワーク研修、広域避難者交流会への相談ブース開設、関東近県協会との協働・合同研修、東京都社会福祉協議会災害支援ネットワーク事業への参加などが、積み重ねられてきたからだと思います。発災後早くから「現地へ行く」「支援の話しを聞く」「自分の出来るかたちで支援に関わる」「多くの会員に伝える」ことをみんなで考えて「災害支援委員会」を「災害対策委員会」に発展させて続けて来たからでしょう。

前と同じ災害が起こる訳ではないからこそ、新しい今に使えるツールや、やり方を「今なら使えるのに」「今なら助けられるかも」と、イメージしたり、使えるように準備することを考えておくことも、大切なことでしょう。経験が生み出した、発災前から復興を考えた街づくり、地域づくりは「災害マネジメント」の人材を育て、発災直後から被災者に寄り添うこ

とで、こころに受ける被害を避け、生活再建の速度を上げることを可能にしていきます。
もう一つ、同じ災害を繰返させないことも、私たちのすべきことだと思います。自然災害を起こさせない、というのは地球温暖化を遅らせたとしても、難しいことですが、それによって引き起こされる二次被害、支援の遅れや、原発の事故、などは防ぐことが出来たのに、すべき準備や回避が出来ていなかった結果でした。失われた命や生活は、知らなかった私たちの責任でもあることを、しっかり胸に刻み、私は今を生きています。

【４】安否確認訓練

～協会として会員の被災状況を確認し、支援ニーズを把握していく～

榊原記念病院　武井　純一

災害支援対策委員会で災害時の協会員の安否確認を行うために訓練を継続してきた。今回は Google フォームを使用し、対象者を都協会理事・事務局と災害支援対策委員、代表世話人に限定して、各自が被災状況を回答する形での安否確認訓練を実施した。訓練で実際に送った内容は以下の通りである(※枠内 URL より、実際の質問内容を確認可能)

【訓練内容】2/26_13：00 発信
＊＊＊これは訓練です。実際の災害ではありません。＊＊＊
こちらは都協会災害支援対策委員会です。
本日 2 月 26 日(木)12:15 頃、多摩西部地域を震源地とする（マグニチュード 7.6）地震が発生致しました。
東京都西部・神奈川県を中心に大きな被害が出ている模様です。協会員の安否確認のため、以下 URL よりご回答をお願いいたします。
◎回答フォーム：　https://forms.gle/N5mWkbk4zrTceDtR6
※訓練対象を「都協会役員・災害支援対策委員・代表世話人」としています。このメールが届いた方は
ご回答ください(おひとり回答は一度で OK です)
※今後の運用の参考のため、回答はアドリブでご入力いただいて構いません。
※訓練実施結果については災害支援対策委員会で共有し、活動報告書等での報告を予定しています。
＊＊＊これは訓練です。実際の災害ではありません。＊＊＊＊

【訓練結果】

2/27_12:15(発災 24 時間経過)時点	訓練対象者 37 名中	22 名回答	（安否不明 15 名）
2/28_12:15(発災 48 時間経過)時点		23 名回答	（安否不明 14 名）
3/ 1_12:15(発災 72 時間経過)時点		23 名回答	（安否不明 14 名）

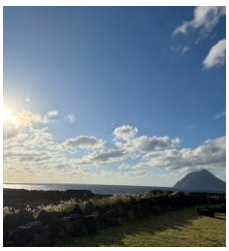
今年度は訓練(安否確認連絡の発信)のある程度のタイミングを理事会や代表世話人会にて事前に伝えていたが、発災から 48 時間時点での回答率は 6 割強。72 時間時点でも回答

数は増加しなかった。また、訓練であるため安否等の状況については各自に回答を任せたが、仮に実際の災害が発生したことを想定すると、回答率は更に低下することも考えられる。Google フォームにて回答するという点では、会員自身の回答に関しての負担はそれほどかからないと考えるが、この訓練結果を踏まえ、如何にして災害発生時に会員の安否状況等を確認し、その後の活動等につなげるか、引き続き検討が必要であると考える。

【5】道～東京 DWAT 八丈島災害支援活動を通して～

河北リハビリテーション病院　山野晶

フリージアの花言葉は「親愛の情」「純潔」「あどけなさ」で、海外では「信頼」「友情」などとも表現され、花の色によってそれぞれの意味があるそうです。東京都八丈島は春になると島中にフリージアの花が咲き、島全体が鮮やかになります。私は個人的に八丈島に数回訪れたことがあり、八丈島の自然、空、食事が大好きで、とても思い入れがありました。



2025 年 11 月、10 月に発生した八丈島の台風被害に対し、東京 DWAT に派遣要請が入りました。能登に続き、東京 DWAT の派遣活動としては 2 度目になります。全 4 クールの中で、第 2 クールに参加し、今回はチームリーダーを担いました。能登は避難所支援でしたが、八丈島は在宅訪問と個別支援を通じた関係機関との連携がメイン業務となりました。2025 年 6 月災害救助法が改正され、支援対象先が避難所から在宅に拡大、能登で課題となったニーズが迅速に制度に反映されました。静岡県牧之原市の竜巻災害に対し、静岡県 DWAT が改正後初の在宅訪問支援を実施。八丈島は二番目の支援活動となりました。

第 1 クールで支援の活動基盤を構築いただき、第 2 クールは活動を展開させつつ、個別支援を実施しました。何より、第 1 クールには能登の活動を通じて出会った研修委員の方々、都協会員の MSW の方が派遣されており、現地で再会した時は本当に嬉しく、安心しました。リーダーとしての活動は初めてなので、緊張と不安が大きかったのですが、第 1 クールの頼もしさに背中を押されました。支援活動中も第 1 クールの方や、都協会の災害支援委員会のメンバーが応援の LINE を送ってくださり、とても励まされました。

現地の活動は、在宅訪問を通じて、島民の方々の互助力の高さを感じました。特に社協、行政、民生委員と島民の距離が近く、日頃から福祉関係者が島民へ関心を向けて、生活の状

況や島民同士の関係性を把握していました。日頃からのつながりが、災害を機に表面化された福祉ニーズと介入の必要性の度合いを含め、重要な情報につながりました。一方、八丈島は専門職の人数が少ないため、災害時対応の限界だけでなく、ケースの支援方針検討に対するコンサルテーションニーズがありました。ケース検討会議を通じ、地域支援者の方との関係構築もでき、支援終了後の報告会には本土の会場に足を運んでくださり、再会できた時は無上の喜びでした。東京都内の支援ということもあるかとは思いますが、東京都社協、八丈島社協との関係も深く、多方面における情報伝達がスムーズだったことも効果的だったと思います。

今回の活動を通し、被災地域、フェーズ、住民や地域支援者の状況や力量によって、DWATとしての支援範囲や介入度合いは全く異なり、改めて何一つ同じ支援はないことを実感しました。特に在宅支援の場合は、社協や民生委員の方々の力が大きく、関係構築により支援がスムーズになることを体感しました。そのためにも、第 1 クールでの現地の状況把握と支援の土台作りが肝心であり、次のクールからはフェーズや対象先の変化を踏まえて、適宜支援内容を変更していく力量が求められます。現場や関わる方々、DWAT メンバーの力を引き出すアセスメントがとても大事であり、日頃の SW 力の発揮のしどころだと思いました。なお、DWAT は専門性が異なるソーシャルワーカーの集まりなので、現地で一緒に活動するメンバーは普段の活動分野は高齢者、行政、居宅など様々です。DWAT の魅力はまさにここにあると毎回感じます。SW として他分野で活動しているからこその差異と、災害支援という目的の共通性から、絶大なチームワークと相乗効果が発揮されます。今回もメンバーとの出会いと活動を通じ、かけがえのない絆が生まれました。災害が起きることは望みませんが、顔の見える関係が広がるのは災害支援にとって本当に重要で、力になると痛感しています。

実は、昨年より東社協と都協会からお声かけいただき、東京 DWAT の内部活動をさせていただくことになりました。こちらの活動では、東京都だけでなく、他県 DWAT の活動や全社協など、DWAT 全体としての組織、運営力の向上が求められていることを学んでいます。様々な活動を垣間見ても、DWAT は MSW の SW 力が本当に発揮できる活動だと感じています。今後都協会を通じて、また全国的にも MSW の登録員が増えることを期待して、活動を継続していきたいと考えています。能登の活動をスタートに、昨年は「点から線へ」と表現しましたが、八丈島の経験を重ね、東京 DWAT の活動はライフワークとしての「道」につながっています。

【６】編集後記

康明会病院　冨士川

新緑がいちばん美しい季節になりました。
私は小・中・高校とサッカーをしていたので、みどりや芝の香りを感じると、勝った時の喜びや負けた時の悔しさが、今でも鮮明に蘇ります。きっと、誰にでも匂いや景色と記憶が結びつく瞬間があるのでしょう。
東日本大震災のあと、サザンオールスターズの「TSUNAMI」がテレビなどで流れなくなったのも、その象徴のひとつです。名曲であるだけに、あの曲を聴くと震災を思い出す人が多いのだと思います。音楽には、それだけ強く記憶を呼び起こす力があります。
そうした記憶があるからこそ、私たち支援する側は、石川県や八丈島のような被災地に向き合い続けています。そして、再び現地を訪れたとき、どのような思いが胸に浮かぶのでしょうか。それはきっと、当時の記憶と今の景色が重なり合う、特別な体験になるはずです。
平和な世の中を願いながら、私自身もまた、被災地を再び訪れたいと思っています

【７】災害支援対策委員名簿

金山真子　東京医科大学八王子医療センター

佐藤真弓　国分寺地域包括支援センターひかり

下田尚子　練馬駅リハビリテーション病院

武井純一　榊原記念病院

武山ゆかり　新宿区男女共同参画推進センター

中辻康博　豊島区医師会

山野晶　河北リハビリテーション病院

冨士川泰裕　康明会病院

根岸正美　陵北病院

【8】

東京都医療ソーシャルワーカー協会

災害支援対策委員募集！

「決して忘れないこと　伝えてゆくこと　続けてゆくこと」

災害支援対策委員会を発足し、災害支援、減災・防災対策を継続しています。

今後も、１人でも多くの医療ソーシャルワーカーの力が必要となります。都協会の会員として一緒に災害支援について考えていきませんか？

募集対象　東京都医療ソーシャルワーカー協会会員

活動内容　委員会（2 か月に１回程度）・研修会・交流会等
委員で活動内容を企画・立案できます。

応募方法　下記のアドレスの件名に「災害支援対策委員会参加申込」として氏名・所属・連絡先を記入してメールしてください。

問い合わせ先：東京都医療ソーシャルワーカー協会

Mail：tokyo-msw@tokyo-msw.com